南国俳壇

紫陽花を浮かべし海の月割れる　門田けんぷ（茅花の会）
段々と鱗模様の田を植えて　浜田民由（〃）
地響きで送る六月旅の朝　山崎　賢（〃）
母逝ってからの泣きぐせ　百日草　別役敏子（大篠俳句教室）
爆忌昏れ　素描の木炭折ってばかり　森本育三呂（〃）
苹を刈る音の速さに「土佐日記」読む　宮田光子（〃）
蝶一つ羽休ませた野の仏　楠瀬紘子（花楛俳句会）
沖へ沖へ灯を遠のけて夏の月　岡田昌子（〃）
水無月の月光語る造船場　岡田寿子（〃）

＊＊＊